WILL

日頃寝　ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＷＩＬＬ

【Ｎコード】
Ｎ４４８９Ｏ

【作者名】
日頃寝　ハル

【あらすじ】
これは未来のはなし。地球が汚染され住めなくなり、人々は２０億光年先の星「ＷＩＬＬ」に移住した。小学校を卒業し、「新しい人類」としてＷＩＬＬに移住してきた未来（みく）は残してきた家族を思いながら、移住して１０年がたった。

（前書き）

これは未来のはなし。地球が汚染され住めなくなり、人々は２０億光年先の星「ＷＩＬＬ」に移住した。小学校を卒業し、「新しい人類」としてＷＩＬＬに移住してきた未来（みく）は残してきた家族を思いながら、移住して１０年がたった。

「本当に？」
未来（みく）は思わず手に持っていた哺乳瓶を落としそうになった。
ぐずっていた末娘をやっと寝かしつけたところだった。
「本当だよ」
彼は愛おしそうにベビーベットに寝ている娘を覗き込んでから、寝室から出た。
リビングのソファーに座って未来（みく）が向かいに座るのを目で促す。
「本来なら君に言うべきではないことなんだ。
　ただ僕は君の夫だからね。隠し事はしたくなかったんだ」
と彼は言った。
未来（みく）は自分のホットミルクと彼にコーヒーを淹れて、彼の前に座った。

未来（みく）が汚染の進んだ地球を出て３０年。
「新しい人類」として「ＷＩＬＬ」に移り住んで１０年が過ぎた。
地球の情報がまったく入らない状況で、もう地球は滅亡してしまったんだと誰もが思っていた。

彼が言うには、地球では、最後に「方舟」と呼ばれる大型の宇宙船を造り、残っている僅かな人間と動物を乗せて出発した。
ただし、未来（みく）等「新しい人類」が地球を出たのを最後に、地球と「ＷＩＬＬ」との距離を縮めるために必要な物質の、たった一つの採掘場所を破壊されてしまった。

破壊したのは、発展途上国のある国で、選ばれし宇宙飛行士に自国の国民を入れることを希望していた。
しかし、「新しい人類」は先進国の国々の中から選ばれ、その国は死に行く地球に置き去りにされた。
その怒りで、唯一つの採掘場所を原子爆弾で吹き飛ばしてしまった。
二十億光年の距離を、２０年に縮めることのできた超レアメタルの損失で、地球を出発した「方舟」はＷＩＬＬに着くのに２００年掛かる。

「地球からの信号はこの星からは遠すぎて拾えないはずだった。
だか方舟が地球の大気圏に突入した直後、何らかの原因で空間が捻じ曲がり、奇跡的にこの星に電波が　届いたんだ。」
「それはいつのこと？」
「５日前だ。高濃度に圧縮された、データを解析していたんだ。
それに地球からの信号は一瞬だったからね。大変だったよ」
彼はコーヒーを一口のみ、息をついた。

未来（みく）は地球に残してきた家族を思った。
お父さん、お母さん、ポチ…
出発の前の日に家でパーティーをしてくれた。
友達はみんな私と会えなくなると、悲しんでくれたし、私が日本を代表してＷＩＬＬに行くことを祝ってくれた。
彼等のために、友達のために、地球の人々を救うために船に乗ったのに、自分たちを最後に地球を見捨てた政府を恨んでいた。
自分がみんなを見捨てたんだと、いつも心に引っかかっていた。

地球から方舟が出発した。
「ねえ、この星には犬がいないね。」
ＷＩＬＬは地球より重力が軽いせいか、ほとんどの生き物は空を飛んでいた。
黙ったままの未来（みく）に彼が言った。
「２００年後にはきっと犬を飼えるよ。」

「私達は人間製造機なのよ。」
そう言い残して死んだ友達がいた。
自分は地球を救うために選ばれた人間なのだと、信じて疑わなかった１８歳の時だった。
１３歳の時に宇宙船に乗って、５年が経ち、ＷＩＬＬに着くまでであと１５年。
彼女は自分達の役割に気づいて、絶望したのだった。
私達は、地球に残された家族や仲間のためにＷＩＬＬを開拓するためではなく、「ＷＩＬＬ《新しい星》」で人類を増やすために「新しい人類」としてばれたのだった。

宇宙葬にされた彼女の身体は、まだ宇宙に浮かんでいるのだろうか。

俯いた未来（みく）に彼は言った。
「二十億光年の孤独という詩を知っているか」
「名前だけなら」
「谷川俊太郎の詩なんだけど」
彼は未来（みく）に向き直った。

「君に聞いてほしいんだ」

今から２００年前の詩だ。

孤独な星と星は惹かれあっている
万有引力とは引き合う孤独な力である
宇宙はひずんでいる
それ故みんなはもとめ合う

「それは予言？」
未来（みく）は訊いた。
「違う」
彼は前髪をかきあげながら言った。
「確かに今思えば予言のようだが、２００年前はただの詩」
彼は一呼吸おいていった。
「だが、真実だ」
「二十億光年先の星で我々は、二十億光年向こうの星と繋がっている」
「お互いにお互いの幸福を願って」

二人はしばらく何も言わなかった。
未来（みく）は目を瞑っていた。
沈黙が闇に染み渡った。静かな夜だと思った。

「繋がっているのね」
未来（みく）は呟くように言った。

ＷＩＬＬに二十年かけてたどり着いたとき、未来（みく）は決めたのだった。
政府が決めた目標は５人の子供を作ること。

そのために、ＷＩＬＬに着いてすぐ、先に星に住んでいた日本人男性と結婚させられた。
「僕たちが日本人の祖なんだ」
と彼が言ったとき
５人目の子供が歩いたら死のう。そう決めた。

「ああ。…だからきっと大丈夫。大丈夫さ」
彼は少し笑って、「希望だ」と言った。

孤独の中の希望。
未来(みく)は星ひとつない黒い宇宙を、まっすぐの光が地球とＷＩＬＬとを繋いでいる光が見えた、ような気がした。

「希望…」
「そう。望みだ。」
自分の名前を呼ばれたと思ったのか、寝室のチャイルドベットの中で、希美があー、うーと騒いでいる。
「起こしちゃったかな」
未来(みく)は急いで寝室に戻った。
希美はチャイルドベットの柵に?まって、腕をつっぱって、胸を張って立っていた。

そうだ。
いつもいつも、一生懸命生きていたんだ。
地球の中で生きている人々も、ここで生きてる人間も。
それを見ないで勝手に一人ぼっちだと思ってた。
私はニセモノの家族を無理やり作らされたことを不満に思って、私の家族をホンモノにしようとしなかった。

結局私は、私が大嫌いなこの国と同じ仕打ちを、この人たちにしていたのだ。

ペタンとおしりをついた希美を未来（みく）は抱き上げた。

ここが私の生きる場所だ、と思った。
もう地球には戻れない。
戻れないなら、私はここで生きていくしかないのだ、と思った。

窓の外には真っ白い夜と、灰色の海の合間を、羽をはやした生き物が縦横無尽に飛んでいる。

大丈夫。と未来（みく）は思った。
２００年後、お父さんとお母さんとポチと小さな私が、きっと笑っている。
笑っている。

希美が腕の中で「ママ」と呼んだ。
ごめんねのかわりに、未来（みく）は「ありがとう」と抱きしめた。

枕元の小さな明かりを灯して、老婆が子供に絵本を読んでいた。
絵本は、荒れた土地に神様が方舟に乗って現れ、人々を救い、みんなで幸せに暮らす物語。
子供はそのお話が大好きで、いつもは繰り返して読んでと、老婆に頼んだが、この夜は老婆が読み終わり絵本を閉じた途端、

「おばあちゃんは古い星に住んでたんでしょう」
と老婆の手を掴んで訊いた。
小さな温かい手。
この手の中には、生きるためのエネルギーがみっちり詰まってるんだわ。
と老婆は思った。
「古い星ではなくて、地球よ」
老婆は微笑んで訂正した。
「どんな星？」
子供は目を輝かせながら聞く。
「綺麗な星よ。青い星」
子供は青い星を思い描こうとしたが、上手くいかなかった。
「もっと聞かせて」
「青い星が広がっていて、雲がない日はそれは清々しいの」
「くもって何？」
「青い空を隠す、白い…この星のガスのようなものね」
老婆はこの子は雲を知らないんだ、と改めて思った。
確かに自分ももう何十年も、雲や、青い空や、青い海、緑の山々を見ていない。
それでも、しっかり頭に思い浮かべることができた。
「ガスが出たら、やっぱりお家に帰るの？」
子供が聞いた。
「地球の雲はお空に浮かんでいるの。
だから家に帰らなくても平気よ。
雲からは雨が降るの」
「雨…？」
「水がパラパラと降ってくるのよ」
変なの、子供はそう言おうと思ったが、口が動かなかった。
「ムシよりもフワフワしてて、トリよりも小さくて、空を飛ばない生き物がたくさんいるのよ」

老婆は子供が何も言わなくなったことに気がついて、顔を覗き込むと、子供はもう寝ていた。

口を開け、スースーと寝ている子供を、老婆は愛おしく感じた。

きっと、あなたが大きくなったら知るでしょう。
１５０年後にこの星に降り立つ神様は、５０年前に地球に置き去りにされた人間で、その人たちがこの荒れた星を救うことなどないことを。
でも、その船には私が守りたかった全ての希望が積んであるのだ。
あなたの子供の、子供の、子供の…いつか遠い未来に、
ポチによく似た柴犬と、繋いだ命の先の子供が、晴天の下で遊べますように。
いつまでも、いつまでもこの平穏で幸せな日々が続きますように。

そう願いながら、老婆は枕もとの明かりを消した。

（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
前々から書きたかった題材で、こうして書けたことがとてもうれしいです。
一話完結にしたかったので、設定が分かりにくい、一話が長い、など至らない点は多かったかと思います。
読んでくれて、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4489o/

ＷＩＬＬ

2010年10月25日08時41分発行